

# 強者の戦略

こんにちは。『讃岐典侍日記』いかがでしたか。今回は解説編です。

※本文5行目、「…といふ女房」が「…という女房」となっております。申し訳ございません。

右の文章は『讃岐典侍日記』の一節で、作者が亡き天皇のことを回想している箇所である。なお、作者は堀河天皇の女房として仕えた女性で、その姉は天皇の乳母を務めていた。これを読んで、後の問いに答えよ。

六月になりぬ。<sup>①</sup>暑さ所せきにも、まづ、去年のこのころは、こともなく御心地よげに遊ばせたまひて、堀川の泉、人々見んとありしを、何とおぼしめししにか、あながちにすすめつかはししかば、「おぼしめすことなれば、まづ、明日」とて、われは出でて人たち待ちしに、ふた車ばかり乗りつれて、日暮らし遊びて帰りしに、われは、今宵とまりて心やすきところにてうちやすまと思ひて、とどまりしを、常陸殿といふ女房、「あな、ゆゆし。ただ参らせたまへ。『<sup>②</sup>扇引きなど人々にせきせん』」などありし。御扇どもまうけて、待ちまゐらさせたまふに」とあれば、この人たちに具して参りぬ。待ちつけて、泉の有様うちうち問ひなどして、「扇引き、今宵は、さは」とおほせられしかば、「明けんが心もとなさに今宵と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらんこそ、くちをしくさぶらへ」と申ししかば、つとめて、<sup>③</sup>明くるやおそきとはじめさせたまひて、人たち召しすゑて、大式の三位殿をはじめてあはれたりしに、「まづ、引け」とおほせられしかば、<sup>④</sup>引きしに、うつくしと見しをえ引きあてで、なかにわろかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、「<sup>⑤</sup>かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など興じあはれしに、そのをりは何ともおほえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるのかなめげに、今日は、<sup>⑥</sup>ありがたくおぼゆる。

注 ○泉——納涼のための建物である泉殿のこと。 ○扇引き——よい扇を引き当てる遊び。

○家の子——ここでは身内のこと。

問一 傍線部(1)(2)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(3)を、指示内容を明らかにした上で現代語訳せよ。

問三 傍線部(4)について、どうして「ありがたく」思ったのか説明せよ。

問四 波線部(a)(b)の動作主を答えよ。

# 強者の戦略

まず、出典である『讚岐典侍日記』の知識確認をしましょう。

『讚岐典侍日記』は、平安時代後期に藤原長子によって記されました。リード文にあるとおり、長子は堀河天皇に女房(貴人に仕える女性。奥さんではありません！)として仕えました。長子の姉が天皇の乳母を務めていたという縁もあってか、二人は主従の關係であったものの、長子は堀河天皇に寵愛されていました。

日記は、天皇の看病を前半で描き、天皇の死後、堀河天皇の子である幼い鳥羽天皇への出仕を後半で描きます。特に、天皇の死後、天皇との思い出を回想するシーンは現実の時間軸と回想の時間軸が入り乱れることが多く、読みにくさを感じる受験生も多いかと思えます。(今回の出題部分はほぼ回想シーンで占められていますが、最後に「今日」と時間軸が現実に戻っていることがポイントです)

日記作品ですので、作者自身が登場人物の一人となることがほとんどですが、作者が主語となる動作は主語の省略が頻繁に起こるのも、読解を難しくする一因です。今回は、問題文の4・5行目に「われ」という語が登場していますので、見落とさずに読解を進めてくださいね！

天皇との思い出を回想しているシーンですから、当然、天皇も登場人物の一人です。天皇と、お仕えの者である作者。二人の間にある「身分差」は、「敬語」にも反映されています。敬語の知識を、場面把握に大いに役立ててください。

それでは、本文を確認していきましょう。

「六月になりぬ。暑さ所せきにも、」

古文の季節は現代と1→2か月程ずれていますので、ここで「六月」と表現されている季節は今の感覚の六月下旬から八月上旬頃、暑さがどんどん厳しくなってくる時期だとイメージしておいてください。

傍線部(1)「暑さところせきにも」、「ところせし」を手掛かりに訳出を工夫する必要があります。

「ところせし(所狭し)」は、

○狭い

○身の置き所がない

○気詰まりだ

○厄介だ

○堂々としている

○仰々しい

などの意味を持つ語で、自分自身が「狭いなあ…」と感じていることを表現している部分と、現代語の「所せましと○○する」といった部分の両方がある語だと覚えてもらえば良いでしょう。

では、暑さが増してくる「六月」、暑さが「ところせし」とはどういうことでしょうか？

徒然草の一節に、「家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まら。」とあります。冬はどういう所にだって(工夫次第で)住むことが出来るから、家造

# 強者の戦略

りは夏を中心に考えて考えるべきだ、ということですね。

冬の寒さ対策よりも、夏の暑さ凌ぎのほうが必要だったことが窺われます。作者は六月になり、逃れようのない暑さを体感していたのでしよう。暑さに圧迫されているとも言えるかもしれません。

「ところせし」の、「狭いなあ…」と感じている心情をうまく活かしてあげれば、

「暑さが(身の置き所のないほど)厳しいにつけても」くらいの訳出に落ち着くでしょう。

「去年のこのころは、」

さて、「去年」という過去を表す情報が出てきましたね。回想シーンが始まりました。亡き天皇もここから登場します。

「こともなく御心地よげに遊ばせたまひて、」

誰の行動か分かりますか? 「くせたまふ」の二重尊敬をヒントにして、天皇と考えるのが自然ですね。作者であれば「たまふ」という尊敬語が使用されていることの説明がつきませんし、その二人以外の人物を断り無しに登場させるのも無理があります。天皇はご気分が良さそうに(詩歌管弦などの)遊びをなさっていました。

「堀川の泉、人々見んとありしを、」

泉については注釈がありますね。「納涼のためにどこかに行くんだな」くらいに考えておいて頂ければ、問題を解くには十分かと思えます。(詳しく言うとな、堀河天皇の里内裏であった「堀河殿」の敷地にある建物のことかと思われまます。)

「何とおぼしめししにか、あながちにすすめつかはししかば、」

また尊敬語が出てきました。帝の行動と考えましょう。帝は何をお思いになったのか、ひたすらに泉殿へ行くことを勧め、人をお遣りになりました。

『おぼしめすことなれば、まづ、明日』とて、われは出でて人たち待ちしに、」

天皇の思し召しなら、泉殿を見てこないとかえって失礼になります。作者は、天皇の御前から退出し、一緒に見物に行く人々を待ちました。

「ふた車ばかり乗りつれて、日暮らし遊びて帰りしに、」

泉殿の見物に来た人たちは、車二台でやって来ました。「日暮らし遊びて」とあるので一日中、泉殿で楽しんで帰っていったようです。

「われは、今宵とまりて心やすきところにてうちやすまと思ひて、とどまりしを、」

作者自身は、天皇の御前には帰らず、「心やすきところ(気楽なところ)」で休もうと思っていたようです。

「常陸殿といふ女房、」

さて、作者の同僚と思しき新しい登場人物が出てきました。何度も確認しますが、「女房」というのは貴人に仕える女性のことです。

『あな、ゆゆし。ただ参らせたまへ。『扇引きなど人々にせさせん』などありし。御扇どもまうけて、待ちまゐらせせたまふに』とあれば、」

# 強者の戦略

波線部(a)に対する解答が気になる箇所ではありますが、それ以前の部分も丁寧に見ていきましょう。

気楽に休もうとしている作者に対して常陸殿は「あら、よろしくありません。ただ参上なさい」と言います(ちなみに、「くせたまへ」という二重尊敬が用いられていますが、会話文の中では皇族以外であっても二重尊敬が用いられるので気をつけましょう)。では、作者はどこに参上せねばならないのでしょうか?…もちろん、天皇の御前ですよ。

「扇引きなど人々にせさせん」などありし」の部分には、引用符が用いられていますから、会話文のように思えるのですが、「言ふ」ではなく、『…』などありし」というように「あり」が使用されていますね。引用符の後の「あり」は、『…』などという言葉があつた」と補って考えると分かりやすくなります。誰かから、「扇引きを人々にさせよう」との言葉があつたので、それに参加するために作者は天皇の御前に参上しなくてはいけない、ということですね。では、「扇引きを人々にさせ」るのは誰でしょうか?…これは天皇だと分かりますよね。天皇から、扇引きを人々にさせようというお言葉があつたので、いつも天皇の側にいる長子がいなければならぬだろうと、常陸殿が参加を促しにきた、という次第です。扇も準備して、天皇は皆を待ち構えているようです。

「この人たちに具して参りぬ。」

常陸殿に事情を説明され、作者は常陸殿たちと一緒に帝の御前へ参りました。

「待ちつけて泉の有様うちうちに問ひなどして、『扇引き、今宵は、さは』とおほせられしかば、」

長子たちが戻ると、帝が彼女らが戻るのを待っていました。泉殿の見物の様子など内輪話として質問し、「それでは、今宵は扇引きを」とおっしゃいました。ここに来て、波線部(a)の動作主が帝であることの確信が持てますね。

「『明けんが心もとなさに今宵と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらんこそ、くちをしくさぶらへ』と申ししかば、」

早く扇引きをしようとしている帝。その帝に対して、誰かが「申し」ます。「心もとなし」は、「待ち遠しい」「じれつたい」「不安だ」などの意味がある語です。今回は「待ち遠しい」が良いでしょう。「夜が明けるのも待ち遠しい(待つていられない)ので、今夜扇引きをする(のが良い)と思います、人々の様子が暗くて見えないのが残念でございます」という意味ですね。扇引きは良い扇を引き当てる遊びですから、引き当てられた扇の美しさや、それに一喜一憂する様子を見ることが出来ないのは残念だ、ということですね。

「つとめて、明くるやおそきとはじめさせたまひて、人たち召しすゑて、」

「つとめて」は、「早朝」や「翌朝」という意味がありますので、どうやら夜は明けましたようです。せつかくの扇引きで、人の姿が暗くて見えないのは残念だ、という意見が帝に受け入れられたのでしょうか。

傍線部(2)の現代語訳について考えていきます。「明くるやおそき」で苦労する人が多いと思います。これは、現代では「今や遅き」という形で残っている表現と同じ構造だと思つて下さい。「今や遅き」は「今か今かと待ちかねている様子」を表す言葉ですから、「明くるや遅き」は、「夜が明けるのを待ちかねたように」ということですね。傍線部(2)は、その他に「くせたまひ」の二重尊敬を考慮に入れて、「夜が明けるの

# 強者の戦略

を待ちかねたように、(扇引きを)はじめなさって」とするのが良いでしょう。扇引きをするため、夜が明けるとすぐに、帝は人々を御前に呼び寄せました。

「大式の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、」

新しい人物の登場です。大式の三位殿は『讃岐典侍日記』に頻繁に登場する女房です。「ゐあはれたりし」の「れ」は、尊敬の助動詞の「る」です。平安時代後期にもなると、助動詞「る」の単独使用による尊敬の用法が見られるようになります。今回は、「大式の三位殿をはじめとして(人々が)居合わせていらつしやっただけ」ということですね。

『まづ、引け』とおほせられしかば、引きしに、」

「おほせらる」という二重尊敬をもとに、扇を引く一番手を指名したのは帝だと分かります。では、波線部(b)の動作主(一番に扇を引いた人)は誰でしょうか？

敬語が使用されていないということがポイントです。名前を省略しても不自然でない箇所が登場している人物は、帝・作者・大式の三位殿です(常陸殿は、同じ女房である大式の三位殿にいったん読者の視線が移っていますから、常陸殿の行動を記述する際には、明らかに彼女と分かる情報を付加するか、名前を出すのが自然だと思います)。

この中で、敬語無しで問題が無いのは作者ですね。よって、波線部(b)の解答は作者、となります。「自分以外にも適任の人は多くいらつしやったのに、帝は扇を引く一番手に私を指名した」というのが作者の言いたかったことです。

「うつくしと見しをえ引きてで、なかにわろかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、」

一番手として扇を引いた作者。結果は「美しいと思つていたものを引き当てることのできないで、(引くことのできる扇の)中でも良くないものを引き当てた」ということになってしまいました。

「うへに投げおきしかば」は、決して「上方に向かって放り投げた」と解釈しないで下さいね。「投げおく(投げ置く)」と表現されているのですから、その状態がキープできないといけません。扇をぼいっと放つておくことのできる「うへ」というのは、「帝の座のあたり」です。作者は、気に入らない扇を引き当て、帝のいらつしやるすぐ近くにぼいっと扇を放置してしまいました。

『かかるやうやある』とて、笑はせたまひたりしことを、」

傍線部(3)は、直訳すれば「このようなことはあるだろうか、いやない」です。「こんなことつてある?!」という驚きを含んだ文脈で使用されることが多い表現です。設問条件で「指示内容を明らかに」とあるので、「このようなこと」の指示内容も忘れずに答えましょう。

指示語の問題は、「地道に一つ前から順に戻る」というのがセオリーです。今回であれば、「うへに投げおきしかば」とあるので、それを検証してみましょう。「帝の座に扇を投げおく」というようなことはあるだろうか、いやない。くだけた表現であれば、「帝の座に扇を投げおくなんて、普通する?しないよね!」でしょうか。上手くニュアンスを残しつつ、「帝の座に扇を投げおくなんて作法はあるだろうか、いやない」くらいの訳出に落ち着くと良いと思います。

直後に「笑はせたまひたりしことを」とあるので、奔放に振る舞う作者に対し帝は本気で怒ったり驚いたりしているのではなく、寛容な態度を見せているということも押さえておきましょう。

# 強者の戦略

「但馬殿といふ人の、『家の子の心なるや。こと人はえせじ』など興じあはれしに、」  
但馬殿も、ここまでの流れから考えて同じく堀河帝の女房であると考えられます。「身内のお心(からの行動)だなあ。別の人は(こんなこと)できないでしょう」などと喋って面白がったようです。長子の姉が堀河天皇の乳母であったという縁や、長子が堀河天皇に寵愛されていたということを踏まえて、彼女を「堀河天皇の(身内)」と表現したのでしよう。確かに、気心が知れていたとしても、帝の座に氣にくわれない扇を放置するという事はなかなか出来るものではありません。

「そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。」

時間に関わる表現が二つ出てきました。「そのをり」と、「今日」です。もちろん、「そのをり」は、去年の六月。そこから、「今日」へと引き戻され、長い回想シーンが終わります。

「いかでさはしまゐらせけるにかとなめげに」は、平仮名続きで少し読みづらいですね。単語の区切りは、「いかで／さ／は／し／まゐらせ／ける／に／か／と／なめげに」です。訳出は、「(当時は何とも思っていないかったことまでも、)どうしてあんなこと(扇を天皇の御前に放置すること)を致したのだろうか」となりませぬ。

「今日は、ありがたくおぼゆる」は、作者の感情であることをまず押さえます。回想シーンには人物が多数出てきますが、それを思い出している作者は一人でこの日記を綴っています。そして、なを「ありがたく(もつたいたなく)」思っているのか特定しましょう。直前との対比がヒントとなります。この部分は、

そのをり(帝存命中) …何ともおぼえず

▽ 今日(帝崩御後) …なめげ／ありがたくおぼゆる

という構造になっているので、当時は何を「何とも思っていないかったのか」、そして今は何を「無礼なことだと思っているのか」を考えましょう。もちろん、「帝の座に氣にくわれない扇を放置する」ということですよ。

では、それを受けて何を「ありがたく」思うかといえば、回想の締めくくりでもあるわけですから、今回の回想のポイントである「帝」が絡んできます。無礼なことをした作者が、帝にどのように「もつたいたなく」を感じるかといえば、もちろん「無礼な行為を咎めなかったこと」でしょう。身内のような心理に浸って無礼なことをしていたにも関わらず、それを咎めることなく皆と面白がっていたという心遣いが、自分にはもつたいたなくという意味です。

## 【解答】

問一 (1) 暑さが(身の置き所のないほど)厳しいにつけても

(2) 夜が明けるのを待ちかねたように、(扇引きを)はじめなさって

問二 帝の座に扇を投げおこなって作法はあるだろうか、いやない  
問三 かつては身内のような心理に浸って無礼なことをしていたにも関わらず、帝はそれを咎めることなく皆と面白がっていたというもつたいたなく心遣いが今更ながらに感じられたから。

問四 (a)堀河天皇 (b)作者

## 【現代語訳】

六月になった。暑さが(身の置き所もない程)厳しいにつけても、まず去年の今ごろは、何事もなく、帝は(気分が良さそうに)詩歌管弦などの(遊びなどをなさっていました)。

堀河(殿)の泉を、人々が見ようと希望していたのを、何を思し召しになったのか、(見てくることを)ひたすらお勧めになったので、「帝の思し召しのことであるから、早速明日(見物に行こう)」という事になって、私は御所を出て、人々を待つていたら、車二つを連れて、やって来られた。一日中遊んで帰ったが、私今宵は(御所以外の場所に)泊まって、気楽な所で休息しようと、とどまったのを、常陸殿という女房が、「あら、それはいけません、ぜひ参内なさって下さい。(帝は)『扇ひきなど、人々にせさせよう』と仰せになっていました。扇などを用意して、待つていらっしやるのですから」と、言うので、この人たちと一緒に、自分も参内した。帝は、待ち受けていらっしやって、泉の様子を、内輪話として気楽にお尋ねになって、「それでは、今宵は扇ひきをしよう」と、仰せられたので、「夜が明けるのも待ち遠しい(待つていられない)ので、今夜扇引きをする(のが良い)と思いますが、人々の様子が暗くて見えないのが残念でございませ」と、申し上げたら、(その夜は結局扇引きはせずに、)翌朝、夜が明けるのを待ちかねたように、(扇引きを)はじめなされた。(多くの)人たちを呼びになり、大弐の三位殿をはじめ、多くの人々が、その座に居合わされたのに、帝は「まず引け」と、私に仰せられたので、引いたところ、美しいと思つていた扇を引きあてる事が出来ないで、(引くことのできる扇の)中でも良くないものを引き当てたので、それを帝の御前に、そのまま放つておいたら、「こんな作法があるだろうか、いやない」と言つて、お笑いになった事を、但馬殿という方が、「身内のお心(からの行動)だなあ。別の人は(こんなこと)できないでしょう」など申されて、面白がられたが、その時には何とも思わなかった事さえ、どうしてあんなこと(扇を天皇の御前に放置すること)を致したのだろうか、と、無礼なこと、今となっては、(それをお咎めにもならなかった天皇の、お心遣いが、)ほんとうにもつたいたなく思われる。